

椎名麟三全集



小説
2

冬樹社

椎名麟三全集 2

昭和四十五年九月十五月初版第一刷発行

著 者―椎名麟三

発行者―高橋直良

発行所―冬樹社 東京都千代田区神田神保町二―一八

電話東京二六四―〇三四六 振替東京七七五七

印刷所―三容堂印刷株式会社

製本所―一重製本株式会社

装幀者―栃折久美子

写 真―講談社写真部

定 価―二〇〇〇円

© Rinzo Shiina 1970

0391-02002-5190

第二卷目次

その日まで	3
希望	193
真実	227
自由	245
病院裏の人々	255
火と灰	303
小市民	333
質札	377
無花果の樹	403
裸体の地獄	429

題 說

本多秋五

473 461

小説
2

その日まで

第一章

1

夜になって、精一はガレージの壁にもたれたままうとうとしていた。しかし間もなく情なさそうな声で呟いた。

「全くうるさいなあ。何をべちゃくちやあんなにひっきりなしに喋りつづけられるんだろ」

しかし眼はひらかない。ただ黄色い眼脂で貼りついている瞼がふるえているだけである。その眼は、煤けた顔のなかで、ある種の魚の眼のように赤黒く丸く腫れ上っている。やがて彼は手を眼へもって行ってこすりはじめた。やっと眼覚めたのだ。

その日まで

「全く忙しいお喋りだなあ」

精一は吐息をした。その五坪ほどのガレージのなかは、死んだように静かである。そのお喋りは外からやってくるのだ。それは、かすれた、意地の悪そうな、舌打ちのはげしい、無数の囁き声である。竹屋の庄三郎が起き上った。彼は、眼尻に皺の多い顔で、遠いものをたしかめているような顔付になっている。やがて独言のようにいった。

「まだ燃えてやがるんだなあ。まきもねえのに勿体ない話だ」

精一は、そのガレージにあふれている罹災者たちを意味もなく眺めていた。彼等は、疲れ果てた顔で、壁にそって寝ころんだり、家族同士かたまり合ってたまっている。精一は庄三郎の独言へ本能的に相槌をうっていた。

「ほんとだよ。全く。これだけ燃えて、いくらぐらい飯がたけるだろうなあ。五升ぐらいかな」

「五升って、お前、五升って……」

庄三郎は、急に真剣になって咽喉をつまらせた。話は、思いのほかの熱意をもって、人々の間に眼ざめた。一体、この下町全体が焼野原になって、どれだけ飯がたけるだろう。とにかく五升である筈はないではないか。人々はめいめい自分の意見を述べ立てた。笑声が起った。精一は、その笑声を深い快さで聴きながら、自分の傍に死体のように寝ころばされている十六、七の娘を見ていた。木綿耕の上衣が焼けこげてぼろぼろになり、乳のあたりがのぞいている。それは豊かに肉付いているばかりか、この時と場所にふさわしくないほど白い。腰のあたりには、誰かの情で、盲縞の焼け焦げた布がのせてある。腰から下は裸なのだ。しかし彼女はまたたしかに生きている。煤けて泥さえついている顔が、苦しそうに喘いでいる。精一は、その幼げな頬のあたりに気付いたとき、ある暴虐なものが、この少女を凌辱し去ってしまったことを感じた。恐らく

この娘は、今晚は持つまい。しかしたとえ生き延び得ても、一生この凌辱からは救われることはないであろう。

「十万石も百万石もたける！」

人々の話に耐えかねていた地所持の鰻屋の老人が、遂に軽蔑したように叫んだ。しかし百万石ってどのくらいあるのだろうか？——風が強くなつて来た。ガレージのまわりのお喋りは、ますます声高になり、はつきりと焼け残りの燃え上っている音となつて来る。ときどき勢よく燃えはぜる音がする。しかしその音の大きさが、今はかえつて情ないほど空虚である。精一は音にひかれたようにガレージの入口へ出ていた。道路の角にあつたためか、側だけぼつりと焼け残っているガレージのまわりは、遙かな焼野原で、昼間消えていた筈の火が、ちろちろ鬼火のように見える。遠い両国の方に、大きな建物がまださかんに燃えている。

精一は、胸全体が乾いた海綿にでもなつたような息苦しさを覚えた。煙が吹きつけて来るからだ。彼は吐息しながら、入口の飲料水を入れたバケツに近寄つた。その焼けただれてへしまがつて来るバケツの水面には、もう灰が一面に蔽つて居り、燃えがらのぼろ屑さえ吹き込んでゐる。彼は、それらを両手で静かにかきわけて、水をすくい上げようとした。すると両手の間から、地上の火へ照りはえてゐる赤い夕焼のような空があらわれて来た。——やがて彼は、まるで世界中でも燃え上っているようじゃないかと腹立たしそうに呟きながら、手から音を立てて水を飲んだ。その彼のすぐ背後で、綿屋の新助の妻が、泣き出しそうな声で、ひとりで繰り返している。

「男の人って、どうしてみなあなんだろ。どうして今、あんなくだらない話が出来るんだろ。どこへたよつて行つていいか判らないこのときに……」

しかし話はもうくたびれている。人々はお互いに何億兆石からとび上つた数字を見せようと焦つては、術

なさそうに笑うばかりだった。やがて誰かが寒いと呟いた。ガレージの真中に焚火がはじめられた。自分の子を探し廻っていた北山穀が帰って来た。精一と同じようにこのガレージから徴用になっているトラックの運転手である。鉄かぶとに作業服姿が、焚火の明りに一層ひよろ高く見える。彼は、よく死んだもんだ、全くよく死んだもんだと誰へともなく呟いて見せながら、自分の妻の傍へ近づいた。妻は、頭から彼のオーバーをかむったままじっとしている。彼は二、三度声をかけた。頭のあたりのオーバーがちらつと動いた。その下から彼女は恐ろしい眼で彼の後の方をじっと見ていた。

「やはり駄目だった」と穀はいった。「旅人橋のもとに三人かたまって死んでいる。ズボンのバンドでや」と判った」

しかし彼女はただ彼の後の方を遠く見ていた。それからやっと気のなさそうな返事をした。

「ああ、そう」

彼女は再びのろのろ頭からオーバーをかむった。穀は妻の傍に坐り込んで、手の真黒な縞帯を巻き直しはじめた。綿屋の妻が、夫を責めるように何かぼそぼそいっている。精一は、我に返ったように壁から身体をはなしていた。次の瞬間、彼はこわばった笑いをうかべていた。全く俺が焼け死んでいると思うではないか。——彼は凭れていた壁を触って見た。やはりそれはガレージへ吹き込んだ焰の跡である。その焰の跡が、焼死体から出た脂肪の、くつきり舗道のアスファルトへ沁みわたっている跡に似ているだけだった。つまり、と彼は大きな息をしながら考えた。今日一日で余り沢山の焼死体を見過ぎたせいなのだ。

「万兆万石……億兆万石……兆万兆石……」と庄三郎が思い出したように呟いている。「しかしそれだけける釜は、まあないだろうなあ」

精一は再びその庄三郎へ相槌をうっていた。

「あるよ！ あるよ！」

「ある？」と庄三郎は、一瞬不安な顔になったが、すぐ傷つけられたようにいった。「そんなでかい金なんてあるもんか！ そんなでかい……」

精一は笑いながら唄うようにいった。

「地獄の釜だよ。地獄の釜……」

「そんなもの！」と庄三郎は蔑むように断定した。「そんなもの、この世の中にあるものか。迷信だよ。ひどい迷信だよ」

そのとき突然鰻屋の老人がいった。

「くだらない……地獄の釜なんて」

「だけど、大和屋のとつつあん。迷信だって、ときに身にこたえるときがあるよ。昨夜の夜中なんて……」

「わしは今迄だまっていたけどな」と老人は誑経している坊主のようにうなじを真直ぐに立てたままいった。

「ふだんからいっていた通りお前さんたちはみな臆病者だ。あの火はお前さんの家で喰いとめたら喰いとめられない筈はなかったんだ。北山のあんちゃんだって、綿屋の新助さんだって逃げた。わしはちゃんと知っているんだ。みんな逃げさえしなれば……。もうあんな家は建ちやしない！」

老人はため息をついた。新助が口をはさんだ。

「でもとつつあん、……国防献金の壺万円、返してもらえばいいじゃないか」

「何をいう！」と老人は腹を立てた。「わしはお前たちと違うんだ。ちゃんと精神というものがある。お前さんたちは、表面ではべこべこ頭を下げていながら、裏へまわっては、わしの家の塀の板をひっぺがしてまきにしがるんだ。お前さんとはいわない。長屋の誰かだ。天皇陛下万歳と涙をながしていついていながら、

すぐその後で、陛下のお写真で汚い尻をふいて見せるんだ。徴用されても、ずるけて闇をやっている。小利口な口を利いても真野のあんちゃんだってそうじゃないか。……徴用がいやならどうしてはつきりいやだといえないんだ。お上の政治向のことに不服があるなら、どうして錦糸町の四つ角で演説しないんだ……」

「死にたくないんだよ。とつつあん」と精一は微笑した。

「だからお前さんには精神というもんがない。精神といっても判るまいが……ただの臆病者なんだ。満州で受けたというたま傷だって……疑うわけではないが……」

「疑ってもいいよ。隊でも相当疑われて痛い目にあつたんだからな。……でもな、とつつあん。その猿江から来ている男でこういう男が同じ隊にいたんだよ。そいつはな、一個小隊で討伐に行つたとき、前方の川の偵察を命ぜられたんだ。その川へ行く百米ほどの、草もない暴露地帯を横切らなければならぬ。勿論そいつは出かけたさ。出かけなければ銃殺だからな。だげどぶるぶるふるえていやがるんだ。とにかく壕から這い出して行つた。だが忽ち小銃の雨さ。そいつのまわりの石にかんかんあたる。とたんにそいつは、ぎゃあとか何とか変な声を出して地べたへかじりついたまま動かないんだ。顔が真蒼になっていて、眼から涙が流れている。それが俺……そう、俺たちの方からよく見えるんだ。俺たちはそいつが余り動かないので、てつきりやられたと思った。するとまたどそどそ這い出している。たまが途切れたからだ。勿論、今度は、はげしくやって来る。すると事もあらうに、助けて呉れ！　なんて馬鹿な悲鳴をあげながら、くぼ地へ頭を突込んでいる。蚤のように尻を丸出しで、その尻がまたぶるぶるふるえてる始末だ。それからまたたまが来なくなる……」

人々は吹き出している。その笑いのなかで毅が腹を立てたように立つた。

「真野！　よしな！　それでもいつもお前はちゃんと立派に任務を果して来たじゃないか！」

精一は殺を見た。その眼はあわれむように細く強く光っていた。精一は笑った。

「俺はただそれがいいかっただけさ」

殺は眼を落した。それから急に何のために立上ったのだろうという風に、あたりを見廻すと、しばらく意味もなく脇腹を両手でさすっていた。やがて大儀そうに吐息すると歩き出しながら独言のようにいった。

「どうも子供のことが気にかかって仕様がな。今から行って始末して来よう。……真野も、くだらないお喋りをやめて、女房でもっと探して見たらどうだい」

誰かの深い溜息が聞えた。ガレージのなかは静かになっている。女房と、精一は考える。どうして女房のことが少しも気にならないのだろう。昨日と今日で、全然別の世界にかわってしまったようではないか。ほんとに俺に昨日まで女房というものがあつたのだろうか。——やがて精一は、壁に凭れたままうとうとしている。すると猫のような白い長いひげを生やした雄鶏が、身動きもしないで、その丸い眼で彼をいつまでも見つめているのである。彼は苦しい吐息をした。すると大きな柱時計が眼の前にかかっている。ぴかぴか光っている丸い真鍮の振子が単調に揺れている。しかしその振子の上に一匹の小猿がつかまっているのだ。小猿はぶらぶら揺れる振子が不安そうである。揺れるたびに、落着なく上や下をのぞいたり、左右を見廻したりしている。そしてときどき訴えるような眼を精一へ向ける。……

精一は眼をこすりながら起上っていた。疲労のためか身体がひどく熱っぽい。傍の娘がひどく呻いている。

「ほんとによ！どこかに担架か戸板みたいなものはないかい？」と精一は眼をさましている庄三郎へいった。「どこの娘か知らないけど、毛利学校まで持って行こうや。傍にいる者がたまらんよ」

夜は、まだ燃えている火で明るい。その焼け残った小学校の前の道路には、負傷者を運んで来た、タイヤのない焼け錆びたリアカーが数台捨てられている。精一は、庄三郎と急ごしらえの粗末な戸板をかついで玄関へ入った。玄関の学童机に凭れて、白髪頭の警戒員の老人が居眠りをしている。精一は、その老人を呼びさました。しかしそのとき、老人の威厳まで呼びさましたらしく、老人は不機嫌に下駄箱の前を顎でさしながらいった。

「そこへ置いておきな」

そして老人は立上って暗い廊下へ消えて行つた。やがて便所の戸をあける音がした。精一は机の下に一枚の紙片の落ちているのを見た。踏まれて泥だらけになっているが、紫色の濃い鉛筆の跡が妙に生々しい。恐らくここから出かける重傷者が、鉛筆をなめなめやと書き記したと思われる避難先と名前が見えた。庄三郎は早速その紙片を拾い上げていたが、すぐにたまらなさそうに呟いた。

「紫色の鉛筆の色っていやな色だなあ。俺は昔から大嫌いだよ」

精一は昼間見た部屋部屋を、もう一度妻を求めてさがし廻った。部屋の中は、近くに燃えつづけている火のためか意外に明るい。そして消毒薬のおいはほとんどなく、汚穢と焦げたぼろのにおいが強かった。ある部屋で、繻帯のなかの一つ目が、精一の後を追いつつと見ていた。身体中布を巻かれていて性別さえ判らない。そして他の患者と同じように床の上にじかに寝かされている。精一は、或いはと思つて近寄った。するとその眼は、男のはげしい憎悪にかがやいた。精一はその部屋を出た。玄関へ戻ると、娘はまだ

置かれたままである。焼材に焼釘を打ちつけた戸板の上で、頭が機械的にゆっくり左右に動いている。

精一は、そのまま玄關を出た。するとそこに庄三郎が立っている。彼は、誰かの消息を探しに來たらしい顔見知りをつかまえて熱心に話をしている。自分の異常な体験をつたえようとしているのだ。

焼跡の火に照し出されて、上気して子供のような喜びに輝いている彼の顔がはつきり見える。彼は、精一に気がつくのと、泡をふくんだ口で救われたように叫んだ。

「真野のあんちゃん！……そうだろ？　ほんとにあのときといったら！」そして再び相手へ向くと、もどかしそうに手真似をまじえながら喋りつづけた。「こう、逃げる……投げる……伏せる……走る……あなたには判りつこないよ。経験しなきゃあ。ほんとだよ。そりゃ、もう、逃げる……走る……伏せる……投げる……駈ける……」

そのとき学校から、うすぐろく変色して、首から上が二倍ほどにふくれ上った異形な顔の男が出て來た。しかも付添う者もなく、たったひとりである。それは生きているというのが不思議なほど無残な火傷で繃帯もない。精一は、この男がどうして歩けるのか理解出来なかった。しかしその男は、のろのろと正確に歩いているのである。だがそのくさった大きなゴムマリのような顔は、もう一生この地上を見ることが出来なくなったように、遠い空の彼方へ真直ぐ向けられたまま凝固している。みじんも動かない。しかしやはり一歩一歩歩きつづけている。

「なんだ、つまらない。あんな奴はありふれているよ」と庄三郎は忽ち興味を失ったように吐き捨てると、再び相手へ話しつづけた。「だが、あなたには、あの火にかこまれたときはどんなにひどいものか、いくら説明しても判らねえよ。……全く夢中だぜ。……ほんとに投げる……走る……伏せる……逃げる……」

精一は、庄三郎より先に帰りはじめた。強い風に焼けトタンや燃えている木片がとんで來る。しかしただ

それだけである。まだ路傍に捨て置かれている黒いゴム人形のような死体に、ともすればつまずきそうになる。しかしただそれだけである。歩いてても歩いてても、焼跡の火ばかりで、きな臭い煙が胸をつまらせる。しかしやはりただそれだけなのだ。ほんとは何事にも値いしないことなのかも知れないと精一は考える。今、世界に、百万の家が焼け、千万の人が死に、一億の人が傷ついているというだけなのかも知れない。そして戦争というものはそれだけのものなのかも知れない。——しかし本当にそれだけのものなのだろうか。

ガレージの近くに穀がうずくまっている。精一に気が付くとぼんやり立上った。精一は疲れ果てた大儀な声をかけた。

「始末は、その……すんだのかい？」

「ああ」と穀も疲れた声でいった。「すっかりすんだよ」

「焼いたのかい？」

すると穀は、ぎょっとしたように精一を見た。その顔は、うしろめたい暗さに蔽われている。やがて穀は、変な微笑をうかべながら曖昧にいった。

「つまり始末しただけさ」

その千葉街道には、夜だというのに避難民の群が流れつづけている。地上の火をうつしたうす赤い南の空のなかから、次々と黒く浮き出して来ては、焼けトタンのとぶ強い風のなかを、重たげに精一たちの前から去って行く。精一は、後から後からいつまでもつづいて来る避難民たちの黒い影を眺めながら、これとそっくりの光景をどこかで見た気がした。そうだ、満州でだったと彼は呟いた。すると彼の胸に家を焼かれ、死と飢えに追われて、わずかの荷物を背にし、傷ついたものを腕に助けながら、黙々と燃えている自分たちの町から離れて行く満州の難民の姿が思いうかんで来た。難民……地上に於ける永久の難民……